



札幌帝國大學

八田三郎様

付史

東京巴谷の馬町

加島屋

勝本 53



三月廿三日東京

札慢を

八田父上様

由世丸

拝啓 暫らく此記沙汰中である
春分迄日増しに明かに相成いこと候が
の程に堪はずいよ生人々の微恙
には全く出来られぬ十九日以來
外も禁止其と臥床を強られぬ
ましむるの元氣を押しこ横たえ
飛ぶこと其の甚しきか治しにあらざ
ればは及ばんとし物の氣に取
つれ冬うあり甚不承過し飛し
夏今日とてか許しが去む解白

きかは郵便

CARTE POSTALE

離れ可成る昔が是の明日離れ
と共に旅費に別れ九々年了我
を定ぬれぬ記りに別れ島子旅
館に揚げうるい今宵限りと
思ふ聊かあつたしん宛書にぬれ
部屋にも名残りが惜しむれ
皆揃にせしと思はぬ之から思
はぬや記沙は遠境十萬に有ん
不日東京を去るに臨みぬ所
仕るべく来しや此島旅費に
年は又と共に山事訪えぬ
が目にかいりやい

大計畫の成就し、近來の情心する
より、實況を希望し、止まぬ
ものは、嘆りよと、其のみに、は、服
せむこと存申は

教員

鼎
お

二伸 廿五日 頃 所 得 可 也
何れ又 故 録 也

きかは便郵

CARTE POSTALE